ラティフンディアの成立と經營（下）

井上智勇

六

從來、ラティフンディア經營が資本主義經營とされるのは如何なる意味に於てゞあるか。そこに使用される資本主義概念は妥當な概念であるか。

抑々、古代經濟に資本主義的生產を認めんとした最初の人はマルカルトといはれる(註一)。マルカルトは、ローマの世界征服と共に金融業の發展したことを指摘し、資本の投資と利潤の追求が全經濟部門に浸透したと認める。「この企業が今や農業にも適用された。小農經濟 Bauernwirtschaft は最早利得を齎らさない、そこで、資本に支へられ、從來とは異つた原理の上に立つ大經濟 Grosswirtschaft が求められて來た。」穀物生產は最小限度にとゞめられ、その代りに、牧畜、オリーブや葡萄の栽培が盛となり、自由農民の代りに、家族を有たない且兵役義務のない奴隷が使用された。小土地を買收して大集積地を形成せしめた。且土地經營の上に種々な工業 Industriezweige を結合した。「かくて、所謂金融事業 Geldgeschäft を許されてゐない元老院議員にも、その大なる資本の投資場が見出された。」(註二)

右の如き見解に立つマルカルトの資本主義は大なる資本の投資を唯一の條件とする概念である。モムゼンやマイヤの古代資本主義存在論も、要するに資本の存在論に他ならない(註三)。その資本とは從つてGeldmacht, Kapitalmachtであつた(註四)。彼等にとつては、それ故、Geldwirtschaftが同時にKapitalismusであつたといへるであらう。

資本主義が交換經濟Geldwirtschaftの一形態であることは議論のない所である。物々交換に於ては、交換の對象は常に使用價値として交換される。使用價値は物に内在する價値である。この内在價値が人にとつて必要なる場合にのみ交換が行はれる。隨つて交換は偶然的である他はない。貨幣の出現によつて物は初めて貨幣といふ普遍的尺度に計られる。物はかくして、使用價値と共に、貨幣の特殊的等價としての交換價値をもち商品となる。物は物と人との關係であつた使用價値の他に交換價値をもつことによつて社會的商品となる。生産の發展は生産品が先づ商品となることを必須の條件とするであらう。洵に交換經濟——貨幣經濟は資本主義の前提である。

併しながら、貨幣經濟のあるところに必ず資本主義があるとは言へない。例へば古代の手工業に於ては、生産者は委託材料に加工して貨幣を得るか、乃至、材料を所有しそれに加工して貨幣を手得するかの何れかである(註五)。何れの場合にしても、手工業者は得たる貨幣を以て自己の生活必需品を買ふのである。彼は勞働を商品として賣り、得たる貨幣を生活必需品に轉化する。この場合貨幣は物を物に轉ずる媒介者たるに過ぎない。言ひ換へれば生産は貨幣を媒介として自己の消費に終るのである。かゝる經濟行程 W-G-W′ の生産は、企業でなくして家計Haushaltに過ぎない。資本主義は本質的に資本の再生産でなければならない。ゾムバルトも言ふやうに、資本主義の營業原理は

自己充足 Bedarfsbefriedigung でなくて、貨幣量の増大 Vermehrung eines Geldsumme でなければならない。即ち資本の連續的増大は資本主義の客觀的目的である(註六)。隨つて、貨幣が商品を媒介として貨幣に復歸する G-W-G の經濟行程は資本主義の一特質である。それは又企業の一形態と言ひかへることが出來るであらう。

企業に於ては常に資本計算がその精神をなす。投下資本とそれによつて得られる利潤との比較によつて、すべての經濟行爲が決定される。一言で言へば企業は利潤追求の經濟である。資本主義が屢々利潤の無限追求の經濟といはれ、或は多量資本の投資 Verwendung von viel Kapital といはれるのもこのためであらう(註七)。

けれども利潤追求經濟がすべて資本主義とは言ひ得ない。小規模の商工業に於ても企業である場合がある。企業の規模——それは企業の目的卽營利目的を實現するために勞働その他の生産財を結合せしめる活動の組織所謂經營 Betrieb である。一定の目的を一定の條件の下に實現することを技術とすれば、經營は技術的活動の組織體である。經營はそれ故技術單位である。隨つて、一つの企業が多數の經營をもつこともあれば、一經營一企業の場合もあり得る。多數の小經營 Kleinbetrieb が一つの企業の中に集中されてゐやうとも、その經營はどこまでも小經營であつて資本主義的經營とは言ひ得ない。企業が資本主義的であるか否かは、その經營が所謂資本主義的といはれるだけの大きさをもつか否かによつて決定されねばならない。フォン・ベローが「近世資本主義の成立」に於て、資本主義は大經營 Grossbetrieb でなければならぬと言つたのは、資本主義概念として最も優れたものであらう。資本主義の章表である分業・多數の生産過程が一つの組織體 Organismus に統合されてゐること、營利經濟 Erwerbswirtschaft

=Unternehmung と消費經濟 Konsumptionswirtschaft=Haushalt との分離等は大經營に附隨して必然的に發生し得るであらう(註八)。ゾムバルトが資本主義の二大性格として擧示する營利原理 Erwerbsprinzip も經濟的合理主義 ökonomischer Rationalismus も(註九)、大經營に內在するものであり、又それによつて可能ならしめられるものであらう。

然らば、資本主義の名によつて呼ばれるだけの經營の大きさは如何。フォン・ベローはこれを「所謂資本主義の特色と言はれる一切の經濟的現象が生じ、特に、數多の勞働者が最早その獨立性を獲得し得ないといふ結果が生れる程の大きさ」(註一〇)と規定するのである。恐らくこの概念規定の背後には、近代の如き發展した生產方法と生產關係が豫定されてゐるであらう。何故ならば、勞働手段の機械化、分業的勞働方法、交換關係を促進する交通の進步、生產用具の一方的分配、等を豫定しなければ、勞働者の非獨立性をいふことは出來ないからである。フォン・ベローが「所謂資本主義の特色と言はれる一切の經濟現象が生じ」といつた言葉の中には右の如き條件が含まれてゐるとしなければならない。資本主義概念を右の如く規定するならば、資本主義は本義に於て近代の產物であると言ふことが出來るであらう。

奴隷と家內經濟的生產手段たる道具を主要生產力とする古代生產に於ては、如何に資本が投下されても、大經營の可能性はない。殊に奴隷が不拂勞働であることは、古代生產を資本主義から絕緣する決定的契機であらう。奴隷はそれ自體獨立性をもたない。彼は永遠に非購賣者である。かゝる奴隷が支配的勞働である古代の奴隷制發展期に於ては

生産が商品となり得る世界は極めて限定された範圍にとゞめられる。それは決して資本主義的生産を可能ならしめる世界ではない。且奴隷の不自由は決して經濟的に規定されたものでなく法的決定である。彼の自由は經濟力に左右されるのでなくて、主人の好意に依存する。彼の主人に對する從屬關係は經濟關係でなく法的關係である。言ひかへれば貨幣によつて結合された關係でなくて人と物との關係である。それは經濟的な「獨立性」が問題になる關係ではないのである。

右の如き、古代生産の基本的條件の一二を以てしても、古代生産に資本主義を言ふことが誤謬であるのみでなく、資本主義の存否を探ねることの全く無意味なることを知るのである。それ故ラティフンディアの經營問題は、それが資本主義であつたか否かの形態辨別でなく、當時の生産力と生産關係との上に於てラティフンディアが如何に經營されたかになければならない。言ひ換えればラティフンディア經營の理解はその可及的分析に俟たねばならない。

註(一) J. Salvioli, Der Kapitalismus im Altertum. S. 162.

(二) Marquardt, Privatleben der Römer. S. 382 f.

(三) Mommsen, R. G. I. S. 855 f.; Ed. Meyer, Die Sklaverei im Altertum (Kleine Schriften Bd. I.) S. 205; Brentano, Das Wirtschaftsleben der antiken Welt. S. 105 f.

(四) Meyer, l. c. Mommsen, l. c.

(五) Gummerus, Industrie und Handel (in Pauly-Wissowa, Realencyclopädie IX. 2).

(六) W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, Bd. I, 1. S. 320.

(七) von Below, Die Entstehung des modernen Kapitalismus (in Probleme der Wirtschaftsgeschichte. 1920.) S. 400.

(八) v. Below, op. cit. S. 403.
(九) Sombart, op. cit. S. 319 f.
(一〇) v. Below, op. cit. S. 414.

七

ラティフンディア經營が所有者の手から離れ、小作人又は農奴に委託された場合は、經營は勿論小經營となり、經營問題としては特に論ずべき必要はない。又ローマに於ては近世に見るやうな資本家的小作人 kapitalistischer Gross-pächter (註一)の活動した痕跡もない。共和制末期から帝政初期(大體紀元三世期頃迄)に於ては、ラティフンディアの所有者は同時にその經營者である。モムゼンその他が、ラティフンディア經營の資本主義を主張する時は、この所有者が同時に經營者である場合、所謂 Gutswirtschaft に就いてである。以下筆者が檢覈の對象としてゐるのも、ラティフンディアが所有者によつて直接經營されてゐるものである。

一體ラティフンディアは如何なる生産力の上に經營されたのであるか。

ラティフンディア勞働者が常時に於ては、奴隷監督者 vilicus に使役される奴隷であることは前に述べた。農繁期の賃銀勞働者の使用は特殊の場合として、生産の主要過程からは、一應除外しても差支ないであらう。奴隷の使用した勞働要具に就いては、詳細には知り得ない。けれども、鋤、鍬等の簡單な農具以外になかつたことは、一般に科學の

缺如した古代農業の通習である(註二)。かゝる農具は、人の肉體の延長以上の意義をもたない。人體を離れてはその機能を發し得ないものである。それは一般小農の家計經濟に於ける道具と異なる所はない。隨つてラティフンディアに於ける奴隷の勞働力は、家計經濟の勞働力の和合である。奴隷數の增加は、それ故、勞働力の extensiv な增加であつても、intensiv な擴大ではあり得ない。卽勞働力の上から見れば、ラティフンディアの經營は如何に奴隷數を增加しても、家計經濟の性質から離れ得るものではないのである。

而も、これ等の農業奴隷 familia rustica は、農業のみをその仕事とする者ではない。葡萄酒・オリーブ油の製造は勿論、編物・家具・綱・柳枝編籠 corbes・小バケツ corbulae・柳枝小籠 fiscinae・簀子籠 crates・杙 vallus・脱穀器 tribulum・rastelli・木造器具 lignei・棹 perticae 等を作り、適當な粘土のある所では陶器 figlinae さへも製造する(註三)。ラティフンディアの Ackersklaven は同時にその Industrielle Arbeiter である。同一の奴隷が、villa の必要に應じて、各種の勞動に充用される。こゝには分業はない。隨つて、ラティフンディアに於ける各種の生産に於ける生産力の發展は行はれ得ないのである。

更に我々は、古代に於ける土地そのものの生産力の貧弱なることを看過すべきでない。勞働手段に於いても勞働方法に於いても特殊な發展のなかつた古代農業にあつては、その生産の多少は土地の良否に制約される。ウァルロの如きは貧田は一年草原にして翌年の收獲を期すべきことを敎へてはゐる(註四)。けれども「能辯術や道化の練習所はあつても、土地耕作法は全く顧みられない」といふコルメルラの記述に徵し、農事記述者に知られてゐる交代耕作 Furcht-

wechsel が、果して一般に行はれたか否か疑ひなきを得ない(註五)。牧畜は行はれてもそれは山野の放牧である。厩舍に飼育する家畜の僅少は(註六)肥料の不足を指證する。肥料の使用もなく、而も連年の耕作は土地の疲勞を招き、生産額の減少を結果する。穀物收獲に就いて言へば、トスカナの若干の地方では、播種の十倍乃至十四倍、シシリ島では約八倍、平均して約四倍であると傳へられてゐる(註七)。ルクレティウスは「農民は孜々として働いてゐる。それにも不拘漸く飢餓を凌ぐのみ」(註八)と、農民の貧困を歌つてゐる。農民のかゝる困窮は、一には後にも指摘する農産物の安價なることと、二には、その勞働に對する土地の報酬が右の如く僅少であることに起因するであらう。

つまり、古代には intensiv な rationell な農業經營は存在しない。右の如き勞働手段と土地との上に營まれるラティフンディアの生産力も奴隷の增加による生産力の extensiv な算術的加算に過ぎない。言ひかへれば、ラティフンディアの生産力は、家計の生産力の加算されたものに過ぎないのである。それが一般小農の生産力の和合と異なる所は、奴隷に對する徹底的な勞働の吸收が可能であつた點であらう。奴隷勞働力の可及的吸收(註九)はラティフンディア經營を小農經營から區別せしめる重點であらう。何故ならばラティフンディア所有者は、奴隷の可及的使用によつてのみ、農産物以外の産物をその農園に於いて産出し得たからである。けれども吾々は奴隷の使用を家計的生産力を飛躍せしめたと考へてはならないのである。

ラティフンディアの生産力が家計の生産力以上でないとは云へ、ラティフンディアの生産が全くオイコスに於いて消費されたのではなかつた。葡萄酒やオリーブ油が都市の市場へ齎らされたことは後に指摘するであらう。併しかゝ

る餘剰生産は、ラティフンディアの生産力が一般小農民のそれに比して本質的な增加をみたためでなくて、妻子をもたぬ奴隷を使用したことによると考へるべきであらう。もし彼等が妻子をもつならば、ラティフンディア所有者も亦「飢餓を凌ぐ」程度に陷るであらう。

註(一) Salvioli, op. cit. S. 181.

(二) id, op. cit. S. 157 f.

(三) Gummerus, Industrie u. Handel. S. 1455. id. Römische Gutsbetrieb. S. 66–67.

(四) Varro, r. r. XXIII. 3.

(五) Salvioli, op. cit. S. 157.

(六) Cato, de r. r. I. 44.

(七) Colum, III. 3. Varr, r. r. I. 44. Cicero, Verr. III. 47.

(八) Lucretius, VI. 1252–1261.

(九) カートは雨が降つても奴隷を休ましてはならぬ。祭日にも仕事を與へよ等と言つてゐる。II. 2–3. II. 4. 同樣なことが Col. II. 22, 1. XI. 2, 90. XII. 3, 6. 等にも見られる。

八

イタリアのラティフンディアに於ける主要産物が葡萄・オリーブ・麥・羊毛等であつたことは、カート・ウァルロ・コルメルラ等の記錄が證示する(註一)。その他山林・漁場が附屬する場合もあれば(註二)、野菜園や薔薇畠に蔽はれてゐ

る場合もある(註三)。かゝる農産物以外に、これに加工した葡萄酒・オリーブ油は勿論、陶器・瓦等の家内工業品が産出されたことは前節にも指摘した。然らば、これ等のラティフンディア産物は、それの經營を企業化せしめたか否か。人はラティフンディアの經營を資本主義的であつたと言ふ前に、先づこの問題を問ふべきでなかつたか。

モムゼンは外來穀物が全イタリア半島の需要を充した結果、イタリアの穀物生産を停止せしめ、葡萄・オリーブの栽培をしてこれに代らしめたとした(註四)。マルカルトは紀前前二〇三年から紀元前一九六年の間に、ローマに於ける穀物價格が、一ヘクトリットル一・九〇マルクより〇・九〇マルクに低落してゐることに注目し、この價格變動の原因を、モムゼンと同樣の見地より、外地穀物の輸入にありとした。それ故彼は全イタリアの穀物生産の不利益を結論したのである(註五)。併し乍ら外地穀物の影響は古來ローマの穀物供給地であつたラティウムに就いて言ひ得ても、これを全イタリア的現象とすることは事實が許容しないであらう。

政府が貧民に外地穀物を給與したことは事實である。けれども政府から穀物を受得した市民は共和制末期から帝政初期に於ては、ローマ市住民中二十萬乃至十五萬人であつて、ローマ市全住民の約五分の一にあたる(註六)。爾餘の五分の四は自費によつて食糧を求めねばならない。キケロは、カムパニアが上等の麥粉や普通のパン粉をローマに輸送してゐることを傳へ(註七)、ストラボンはポー河流域に穀物生産の多きを記錄してゐる(註八)。イタリアは決して穀物生産を停止してゐない。外地穀物の輸入がローマ近郊に與へた影響を全イタリア的現象とすることは、事實に反する妄想と言はざるを得ない。

然らばラティフンディアの穀物生産は企業化さるべき世界をもつたか。ベロッホの詳細を極めた研究によれば、紀元一世紀――恐らくローマの極盛期と言へよう――に於ても、全半島の人口は奴隷約一五〇萬を加算しても約七〇〇萬である(註九)。隨つてイタリアの人口密度は極めて低かつたとしなければならない。而も當時ローマ以外の都市人口は殆んど言ふに足りない。何故なら、最も殷盛な都市の一とみるべきポムペイと雖も約二萬を數へるに過ぎないのである(註一〇)。隨つて、ローマ市居住人口約一〇〇萬を除いた六〇〇萬の人口は殆んど農村人口であつたとしなければならない。

シシリ島・アフリカ・エヂプト等の屬州穀物と、ラティウム・カムパニア等のローマに接近した地方の提供する穀物は首都の食糧を充すであらう。地方の農村は穀物市場を少數の且つ小規模な都市に求める他はない。如何に穀物生産額が僅少であつたにしても、供給は需要を凌駕するであらう。ポリビオスがポー河流域地方の穀物生産に就いて記述し、併せてその價額に就いて傳へてゐる記錄は、こゝに注目さるべきであらう。

「この地の豐饒なることは筆紙につくし得ない。穀物(小麥)の産額は非常に多きため、シシリ流の一メディムヌス medimnus 四オボル、大麥は同じく二オボルであることが少くない。そして一メトレテス metretes の葡萄酒は一メディムスの大麥の値に等しい。」

これを當時のローマに於ける小麥の平均價格一モディウス三オボル(註一二)に比較するならば約四・五分の一である。小麥の産地として有名なエヂプトの一モディウス一・二オボル(註一三)の約二分の一に相當する。

テニ・フランクは、このポー河流域の穀物價格の低廉を、この地方に大市場の存しないことに歸してゐる（註一四）。けれども、ローマ以外に穀物價格を昇騰せしめる程の都市が存在しなかつたことを思ふならば、穀物に對する市場の缺如は、敢えてポー河流域に限るべきでなく、全イタリア的現象として大した誤りではないであらう。市場の僅少は、先づ、穀物價格を低廉ならしめると共に、穀物生産を企業化ならしめることを不可能としたと言はなければならない（註一五）。

尙この際奴隷の使用が考慮されねばならない。コルメルラによれば一人の男子勞働力が一年に耕作し得る平均量は六乃至七ユゲラであつて、約一〇〇モディイ（凡そ八ヘクトリットル）の收獲をあげる。播種を除く殘餘の六ヘクトリットルは大體一人の奴隷の食糧に當る（註一六）。云ひかへれば奴隷一人の穀物生産量は彼の食糧を越えること大ではない。それ故に、ラティフンディアに生産される穀物は、奴隷とその主人の家族に於て大部分消費されたと言はねばならないであらう。筆者はそれ故に、ラティフンディアの産物中、先づ穀物は、ラティフンディア所有者の家に於いて消費され、若干の餘剩 Überschuss が市場に齎らされたに過ぎないと主張する。言ひかへれば、穀物生産は、家の消費を目的とするもので、商品への轉化は、餘剩のある場合に限られた偶然的事實なのである。即穀物生産は本來 Unterneh-mung の生産でなくて Haushalt の生産である。

穀物生産の有利ならざることは從來の學說に於いても說き來つた所であつた。けれども、從來の學說に於いては、外地穀物の輸入によつてこの現象が惹起されたと主張したのである。それはイタリア半島全體がローマの穀倉であつたこと、その限り穀物生産が有利であつたことを前提としてゐるのである。これに對して筆者は、外地穀物の輸入が

ローマ近郊に對してのみ影響をもつのみで、全イタリアの大部分はこれと無關係であること、隨つて地方穀物生産が企業化され得ないのは、外地穀物の輸入に起因するのでなくて、當時の生産力と生産關係の必然的結果であることを强調するのである。

註(一) Cato, I. 7. Varr, I. 8, I. 23, I. 24. Col., III. 3, V. 8, VI. praef.

(二) Cato, l. c.

(三) Pöhlmann, Die Übervölkern d. antiken Grossstädte. S. 45.

(四) Mommsen, R. G. I. 840.

(五) Marquardt, Privatleben der Römer. S. 381.

(六) J. Beloch, Die Bevölkerung der Griechisch-Römischen Welt. 1886. S. 397 ff.

(七) Cic., pr. leg. Agr. I. 7, II. 29.

(八) Strab, V. 1, 4.

(九) Beloch, op. cit. S. 437.

(一〇) ibid. S. 480.

(一一) Polyb, II. 15.

(一二) T. Frank, An economic survey of ancient Rome. vol. I. p. 192.

(一三) ibid.

(一四) ibid. p. 196.

(一五) Vgl. Max Weber, Römische Agrargeschichte. S. 221.

(一六) Col. I. 7.

九

然らば葡萄及びオリーブ栽培に就いては如何。

從來人々は次の如き見解をとつてゐる。――穀物生産に代つて、ラティフンディアは廣大な葡萄及びオリーブ生産地に變じた。葡萄酒及びオリーブ油は、重要な輸出品であつて、その生産は强力な需要を充し得なかつた。葡萄園やオリーブ園への投資は極めて有利であつた。(註一)――ラティフンディアの資本主義的經營を云ふ者は恐らくこの生産面について考へるのであらう。

さて、共和末期から帝政初期の農事記述者が、オリーブ・葡萄の栽培の盛んであることを擧示してゐることは事實である。勿論イタリアに於て、これ等の生産がこの時期に初めて興つたと考へられてはならない。オリーブ・葡萄の栽培が共和制以前より行はれてゐたことはマルカルトと雖も認めてゐるところである(註二)。隨つて農村のオリーブ・葡萄の栽培の盛なるは、共和末期に於ける突然變異でなく、徐々なる發展の結果とみるべきであらう。

ではこのオリーブ・葡萄の栽培は、そこに資本主義的經營を考へるべき生産關係に於て行はれたものであらうか。

プリニウスは、オリーブ栽培がタルキニウス王時代よりラティウムに行はれ、そこよりヒスパニア・ガルリアに廣がつたと記述してゐる(註三)。筆者は、西歐のオリーブ栽培が、プリニウスの傳へるやうに、ラティウム起源であるか否かを知らない。筆者がこゝに、このプリニウスの記錄の一節を引用するのは、その起源を探ねるためではなくて、

ヒスパニア・ガルリアに既に古くよりオリーブの栽培があつたことを立證せんためである。希臘の地にオリーブの多きことは周知の事實である。隨つてよしテニ・フランクのやうに、デロス島にイタリアのオリーブ油商人が居住してゐたことを認めるにしても(註四)、それを巨大視することは出來ない。イタリアのオリーブは大體に於てその市場をイタリア内に限定されたとみるべきであらう。葡萄栽培についても同樣である。プラウツスやカートの記錄は、ローマに於て Leucas, Lesbos, Thasos, Cos, Chios の葡萄酒が賞味された事實を立證してをり、(註五)又、ガルリアの諸族民が葡萄栽培を行つてゐることは、マルカルトが詳細に指證してゐるところである。それ故に、假令マルカルトの如く、イタリアの葡萄酒がローマ帝國の至る所に高評を博したと云ふ痕跡(註六)を認めるとしても、それはサルヴィオリも言つた如く、ローマの軍隊と共に廣がつたか、或は部族の首領に對する贈物によると推定すべきであらう(註七)。殊に上酒が希臘・ガルリア・ヒスパニアから輸入されたことをみるならば(註八)イタリア產の葡萄が多量に輸出されることはあり得ないと言はねばならぬ。

それではイタリアは、内地生產の葡萄に對して、充分なる市場を提供したか。ローマ市の人口約一〇〇萬として、政府の保護を受けねば生活し得ない貧困者約二〇萬及び奴隷約二十八萬(註九)を減ずるならば殘りは約五十二萬である。このうち、飲酒を禁ぜられてゐる婦人(註一〇)と子供を除くならば葡萄酒需要者は十萬内外となるであらう。ローマに於て如何程消費され、ローマ近郊に幾何生產されたかを詳にしないけれども、ローマの需要はその近郊の生產で充し、その他に於ては極めて制限された地方的消費 Lokalkonsum の市場しかなかつたと考へられる。交通機關の發

達しない當時、破壞し易いアムフォラ Amphora に入れた液體が、多量に、遠隔の地に輸送されたと考へることは出來ない。事實葡萄酒の價格は極めて低廉であつた。共和末期から帝政初期のローマに於ける價格は、輸入葡萄酒約二十六リットル入アムフォラの小賣値段一〇〇デナリイ、卽一リットル約七五セントである(註一二)に對し、內地生產の並酒は一リットル約四セントである(註一三)。プリニウスがイタリアの葡萄酒が極めて安價であつたと記錄してゐる(註一三)ことを銘記すべきであらう。

市場の僅少、價格の低廉、交通機關の未發達——これ等の條件の上に、一般にラティフンディアが葡萄を企業的に栽培したと考へることは不可能である。このことは又葡萄酒製造及び販賣方法に關する事實が立證するであらう。

葡萄酒製造が企業化され得たのであるならば、鐵工業・羊毛工業・陶器製造等(註一四)と共に、葡萄酒製造業も都市のマヌファクチャーの一となつてゐたであらう。吾々は未だこの事實を指證するものを知らない。これに反して、次の如き事實を擧示し得るのである。一、農園は穀物倉や貯藏室の他に多數のオリーブ油や葡萄酒の桶を備へてゐる(註一五)。二、農園はその生產品を賣るための容器 Amphora, Dolia をも作る(註一六)。三、オリーブ油・葡萄酒製造の受負者のある場合も、その製造には農園附屬の要具を使用する(註一七)。四、ポムペイの發掘によれば、葡萄酒の容器には屢々、農園の名、又は農園所有者の名、或はその農園の奴隷監督者の名、又はその頭文字が刻印されてゐる(註一八)。五、時に葡萄酒卸賣商人の商票が刻印されてゐる場合がないではない。けれども、葡萄酒商人の大倉庫とおぼしきものは今の所みあたらない。のみならず、一千以上のマークのうちで、同一商人のマークは極めて稀である(註一九)。以

上の事實を綜合して筆者は次の如く結論する。一、葡萄酒は――オリーブ油も同樣である、――直接農園に於て、農園所有者によつて釀造された。製造受負業者も多量の原料を都市に運び集めて大經營を行ふのでなく、農園所有者の製造を代行するに過ぎない。二、葡萄酒の仲買人は皆無ではない。けれども葡萄酒賣買が彼等によつて組織づけられてゐるといへない(註二〇)。三、一般的常態としては、農園所有者は釀造し、貯藏し、而して、家の需要を除く餘剩生産を、近接都市の小商店へ販賣する。四、隨つてラティフンディアの葡萄の栽培及び葡萄酒の釀造は、それを企業たらしめる世界――Mehrprodukt が Mehrwert になる世界――にあつたのでもなく(註二一)、又事實、家計から獨立した企業でもなかつた。經濟段階說の如くに、生産が家の消費に終る封鎖的家內經濟であると云ふことは、その絕對的な意味に於ては承認出來ない。それはダムメルスやマイヤの强調する通りである。併し、それであるからと云つて從來承認されて來た如く、資本主義經營と言ふことは絕對に不可能である。

葡萄栽培については言ひ得たことは、オリーブ栽培についても同樣である。最早次の事實を指摘すれば充分であらう。一、オリーブ油は農園で直接作られる。二、仲買入を經ずして、製作者から直接に都市の小賣店へ賣却されるのを普通とする(註二二)。

それ故、ラティフンディアの主要産物たる葡萄・オリーブに就いて、われ〳〵は、その生産形態を資本主義的と言ひ得ないことは勿論、純然たる企業とさへ言ひ得ないのである。

註(一) Marquardt, Privatleben d. Römer. S. 429 ff. Mommsen, Seeck, Friedländer 等も同一の見解をとつてゐる。

(二) Marquardt, op. cit. S. 427 f.

(三) Plin, n. h. XV. 1-34.

(四) T. Frank, An economic survey of ancient Rome. P. 284.

(五) Cato, de r. r. 24. Plaut, poen. 3, 3, 86.

(六) Marquardt, op. cit. S. 430.

(七) Salvioli, op. cit. S. 167.

(八) Marquardt, l. c.

(九) Beloch, op. cit. S. 404.

(一〇) Plin, n. h. XIV. 13, 89.

(一一) Diod. 37, 3, 3. Plin, XIV. 95.

(一二) T. Frank, op. cit, p. 403.

(一三) Plin, n. h. XVIII. 3, 17. XIV. 4, 56.

(一四) Gummerus, Industrie u. Handel. S. 1463 ff.

(一五) Cato, III. 2.

(一六) Paul, Digesta. VIII. 3, 6.

(一七) T. Frank, Economic history of Rome, 1926. p. 257. Cato, 144 ff.

(一八) T. Frank, Economic history of Rome, 1926. p. 257.

(一九) ibid.

(二〇) ibid.

(二一) Salvioli, op. cit. S. 182.

(二二) T. Frank, op. cit. p. 258.

一〇

ラティフンディア所有者は通常廣き牧場をもつ。牧場は勿論農園ではない。けれども土地所有者にとつて、農業と牧畜とは、土地利用法の相違にとゞまる。牧場も農場も彼の所有地である點に於ては變りはない。ラティフンディアが所有概念である以上、土地の利用法によつて農場から區別される牧場 pascuum もラティフンディアの一形態とみなければならない。

希臘に於けると同樣に、ローマ人の衣服原料は古くより羊毛である(註二)。羊の飼育は、リウィウスによれば、既に王政時代より初まるといふ(註三)。ローマに於ける羊飼育の起原はこゝで問題としない。唯共和末期より帝政期にかけて羊の牧場が殆んど全イタリアに散在してゐたことを先づ認めれば足りる。當時羊毛の主要産地として聞えてゐたのは大體次の如き地方である。南部では、アプリア Apulia カラブリア Calabria 特にタレンツム地方(註四)、北部では、ポー河流域地方(註四)、特にパルマ Parma, ムティナ Mutina, 等を中心としたアエミリア Aemilia,(註五)、及びアルティヌム Altinum, パタウィウム Patavium, アキレイア Aquileia 等を中心としたウェネティア Venetia,(註六) 並にポルレンティア Pollentia を主要産地とするリグリア Liguria (註七) 等である。

然らば牧場に生産される羊毛は常に商品價値をもつたのであるか。イタリアに生産される羊毛が商品價値に轉化す

るためには、イタリア以外の地方に衣服原料として輸出されるか、乃至は、イタリアの都市に原料としてか又は毛織物として販賣されねばならない。一體イタリアの羊毛の市場はどこにあつたか。

既にマルカルトが詳細に證示したやうに、希臘・小アジア・ガルリア等が羊毛の產地として有名であり、或は原料として、或はその製品がローマに輸入されてゐる(註八)。それはこれ等の地方の羊毛がイタリア產のそれよりも優良であり、自然に具備する色彩――褐色・赤色・黑色・黃褐色・暗褐色等――が染色の手を省かしめるからである(註九)。これ等の事實は、ローマ領の各地方はそれ〴〵衣服原料を產出すると共にそれを織り成す、言ひかへれば、それ〴〵の地方は衣服原料と機織に於て獨立性をもつ、イタリアは隨つてその羊毛市場を海外に求め得ない、否優良品は、却つて、外地より輸入された――等の事實を指證するのである。勿論これによつて輸入羊毛がイタリア市場を獨占したとは言へない。運輸機關の未發達な當時、而も優良品と認められた輸入羊毛は、その原料に於ても製品に於ても高價品であつたに相違ない。隨つてかゝる遠距離通商によつて齎らされた羊毛及び製品は、一般人の必需品ではなしに、少數の富裕者を購買者とする奢侈品である他はない。筆者はこゝに古代に於ける遠距離通商 Fernverkehr の古代經濟界に於ける地位の一端を窺知する者であるが、今はこれ以上深入りしない。

さて、イタリアの羊毛は海外にその市場をもち得ない。逆に外地はイタリアに市場をもつた。けれどもそれは一部のイタリア人を對象とするのみであつた。かくてイタリアの羊毛はイタリアに於てなほ若干の市場を有ち得るであらう。

前記羊毛産地の中心地として擧示した都市は、勿論羊毛工業の行はれた所である。この他ローマが上着 toga や下着 tunica を生産したことも既に記述した(註一〇)。ローマに於て輸入された羊毛が織られた事實に就いても前に述べた。ユウェナリスは賃銀織物女工 conducta...texit の存在したことをも指證する(註一一)。それ故都市に獨立の織物業者が存在したと言つても誤りではないであらう。隨つて又吾々はこれ等の獨立機業者が農村の羊毛原料の一購買者であつたことを認め得るであらう。

然らば土地所有者は常にかゝる機業者に對する原料供給者であつたか。言葉をかへれば、都市の機業と牧羊とは社會的分業として分離してゐるのを常態としたのであるか。又、牧羊が企業であるためには、機業が同時に企業でなければならないであらう。牧羊の考察は隨つて毛織工業の考究を隨伴しなければならぬ。

吾々は先づ次の事實に注目する必要がある。第一、ローマには既に王政時代に金細工職人 aurifices・銅器匠 fabri aerarii・鞣皮匠 coriarii・靴屋 sutores・大工 fabri, fabri tignuarii・陶工 figuli 等が獨立の手工業者として生計し、各々職人組合 collegium opificum を作つてゐたと傳へられてゐる(註一二)。組合の構造等はこゝでは省略する。たゞ古くより都市に手工業者があつて同業の者が何らかの集團をなしてゐたことを認めれば足りる。共和末期から帝政時代には、尙、石屋組合 collegium sectorum serrarium・製粉業者組合 coll. pistorum・肉屋組合 coll. laniorum・洗張屋 fullones・木挽 faber materiarius 等の組合の存在したことが確められる(註一三)。つまり都市に存した手工業者は殆んど皆組合を作つてゐたのである。然るに紡績工や織物業者の組合が存在したと言ふ確證はないので

ある(註一四)。このことは、紡績や機業が都市の有力な手工業となつてゐないことを指證するものではなからうか。第二、衣服をしつらへることはローマ人の家に於ては、古くより主婦や下婢の仕事であつた。共和末期より帝政初期に奴隷の使用が盛んになり、主婦が手を下さなくなつたとは言へ、その仕事が家から分離することはなかつたのである。何故なら、田舍に於ても都市に於ても、富裕者の家ではその奴隷—familia rustica, familia urbana—は、vilica 又は毛織監督者 lanipendius 或は lanipendia の下にかつ紡ぎかつ織り成すのである(註一五)。卽地方の家はその勞働によつて、原料を生産するのみでなく、直接それに加工して家の需要を充し、市場に依存することが少かつた。奴隷所有者の家はその經濟的獨立力をより多く所有したと言ふサルヴィオリの見解は正當であらう(註一六)。第三、ポムペイの發掘は、至るところに紡錘を見出した。これはテニ・フランクが斷定してゐるやうに(註一七)、紡織が猶家庭 household に於て行はれたことを明證する。そしてこの事象は單にポムペイの特殊現象でなく、イタリアの都市全體の事象としても決して誤りではないであらう。何故なら羊毛原料はカムパニアに限られず至る所に産出され、强力な生産力をもつ機械の發明なく、工場に於て大經營的に生産されたといふ事實がない時代であるから(註一八)。

以上の事實から筆者は次の如く結論する。都市に——特にローマには若干の機業家が存在した、併しそれが決して多數に存在したのではなく、又一般的な存在でもなかつた。むしろ農村に於ても都市に於ても、多くの家庭は自らの勞働で紡織した。大土地所有者はその奴隷勞働力によつて原料生産も加工も行つた。彼はその比較的多數の勞働力によつて家の需要を充し、尙若干の餘剩を生産するであらう。けれども右の如き社會は、羊毛及びその製品に對する大

市場を提供しない。イタリアの牧羊はかくて本質的には企業たり得ず、家の需要を充すことを主要目的とする。卽使用價値として生産され、商品價値に轉化するのは唯その餘剩のみであつた。隨つて、こゝに於ても、經濟段階說の封鎖經濟を强調することの誤謬であることを言ひ得ても、資本主義經濟を主張すべき根據は皆無であることは勿論、純然たる企業とさへ言ひ得ないであらう。言葉をかへれば牧羊も紡織も Haushalt と Unternehmung との未分の狀態にあり、本質的には Haushalt の段階を未だ離れてゐないと言ふべきであらう。

註(一) Mommsen, R. G. I. 34.

(二) Liv. I. 4, 6.

(三) Col, VII. 2, 3, Mart, VIII. 28, Strab, VI. 284.

(四) Varr, r. r. IX. 39: lana Gallicana. Col, VII. 2, 3: oves Gallicae.

(五) Col, VII. 2, 3, Strab, V. 218. Mart, XIV. 155.

(六) Col, l. c.

(七) Col, VIII. 2, 4, Plin, n. h. VIII. 191, Mart, l. c.

(八) Marquardt, op. cit. S. 460.

海外屬州の毛織物産地としては、スペインでは Corduba を中心とした Baetica, 及び Tudetani の地方が知られてをり (Plin, n. h. VIII. 191, Strab, III. 144, Mart, IV. 61, 1 ff.), ガルリアでは、Lingones, Santones, Sequani の地方が有名 (Strab, IV. 196 f. Mart, I. 53, 5; 92, 8, IV. 19, 1, VI. 11, 7, XIV. 128). ローマ人がやがて北ガルリアに持ち來つた良種の羊が帝政末期に榮えるベルギの毛織物の原料となつたと言はれる。(Strab, IV. 196, Hist, Aug. Gall. 6, 6).

(九) Marquardt, ibid.

(一〇) 第五節の註三一參照。
(一一) Juvenalis, VIII. 43.
(一二) Plut, Numa. 17. Kornemann, Collegium (in P-W.).
(一三) Kornemann, ibid.
(一四) T. Frank, An economic history of Rome. 261. Vgl. Kornemann, op. cit.
(一五) Gummerus, Industrie u. Handel. S. 1455 f. Marquardt, op. cit. S. 153 f. Friedländer, Sittengeschichte Roms, Bd. I. S. 462.
(一六) Salvioli, op. cit. S. 101.
(一七) T. Frank, op. cit. p. 261.
(一八) ibid.

結　語

ラティフンディアの主要經營を以上の如く分析するならば、吾々は、ラティフンディア經營がその生産力に於ても、その生産關係に於ても Haushalt の構造をもち、それから本質的に變質したものでなかつたと主張し得る。勿論その餘剰生産 Überschuss が市場に齎らされた。その意味で、生産品が家の消費に終る封鎖的家内經濟 geschlossene Hauswirtschaft とは言ひ得ない。併してその餘剰生産は全く土地の extensiv な擴大と自然的豐饒に依存し、經營の合理化・intensiv な經濟によるものではなかつた。卽生産は商品價値の産出の爲に組織づけられたものでなく、本

質的には、家の直接使用のための使用價値 Gebrauchswerte として生産され、唯例外的に im Ausnahmefällen 生産品は商品となつたのである。土地・奴隷・羊等の固定資本を除外するならば、巨大な經營資本 Betriebskapital の投資が行はれたといふこともない(註一)。

人は農事記述家が尙薔薇の栽培・食用獸の飼育・孔雀蒼鷺等の家禽の飼育・蜜蜂の飼育によつて多大の利益をあげた(註二)といふ記錄を誇大してはならない。既にサルヴィオリも指摘してゐる如く(註三)、かゝる特殊な産物はローマの近郊 sub urbe に於てのみ企業的に生産されたのである。而もこれ等の産物はローマ人一般の食糧や愛玩品ではなくて言はゞ奢侈品 Luxuswaren である。それは一部の富裕者にのみ購買されるものである。隨つてかゝる企業化された生産をラティフンディア經營の一般的性格とすることは出來ない。ガルリアとイタリアとはローマ市の周域 Roms Weichbild であるといふモムゼン的見解は(註四)、少くとも經濟的には成立しない。ローマ市の如く巨多な人口を抱擁する都市及びその周域と爾餘の世界とを、交通機關の未發達な古代に、同一の經濟的世界とすることは警戒されねばならぬ。ローマ市近郊のラティフンディアに企業的經營が存在したとしても、それを全イタリア的現象とする從來の支配的見解は事實に反するものとして排斥されねばならないであらう。

ラティフンディア所有者は、その生産品を自己の奴隷に加工せしめる意味に於て、同時に Industrieller である。彼の奴隷は播種し、收穫し、製粉してパンを作り、葡萄酒・オリーブ油を釀造し、羊毛を刈り、染色し紡ぎ、織らねばならぬ。又木造器具・綱・編物・陶器・煉瓦・靴等も作らねばならぬ(註五)。ラティフンディアとその勞働は可及的に

家の需要のために使用される。Landwirtschaft は同時に Industrie を含む。Grundbesitzer は小さいながら一つの經濟的全體構造 wirtschaftlicher Gesamtorganismus をもつと言へるであらう(註六)。ラティフンディア經營は封鎖的家内經濟ではない。けれども家内經濟的生産方法から離脱したものでもなく、純然たる企業でもない。家計は例外的にのみ企業的經濟を伴ふ。筆者はこれを家計の變種 Bastard des Haushalts と呼びたい。隨つて從來支配的に認められたラティフンディアの資本主義的經營といふことは絶對に否定さるべく、それと共に、共和末期の小農民の土地の喪失も、ラティフンディアの資本主義經營による經濟的抑壓に起因するといふ支配的見解も修正さるべきである。この問題に就ては、恐らく、ローマ市民の兵役の義務と連年の戰爭にもとづく負債の增加が考慮さるべきであらう。

追　記

ローマ經濟全體に關して資本主義が存在したか否かの問題は、尙種々な工業に就いての實證を必要とするのみならず、商業及び金融業に就いても檢討されねばならないであらう。又ラティフンディアに關しても、帝政後期には Gutswirtschaft から Kolonensystem に轉化する。ローマ農奴制の成立を論じなければ、ラティフンディアの經營問題に完答したとは言へないかも知れない。これ等の種々な問題が尙殘されてはゐるが、これ等の問題は自ら別な觀點を必要とする。殘されたこれ等の問題に就いては又後の機會に考究したいと思ふ。

註(一)　Salvioli, op. cit. S. 173.

(二) Varro, III. 2, 17.

(三) Salvioli, op. cit. S. 186.

(四) Mommsen, R. G. I. 854.

(五) Gummerus, Industrie u. Handel. S. 1455 f.

(六) Salvioli. S. 172.

(昭和十四年三月稿了)